

## 私ときのことの繋がり

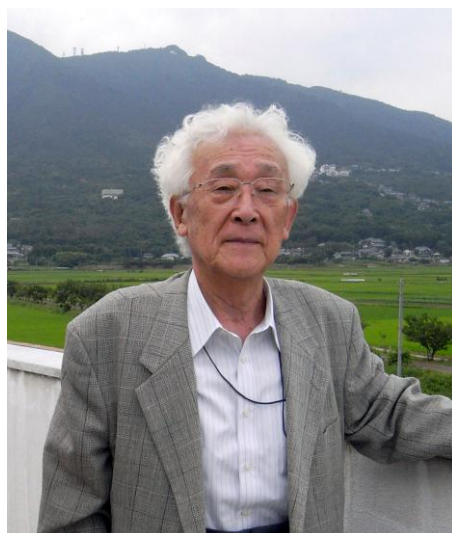
古川 久彦

### 出会いは小学時代のシイタケ

私は昭和のはじめに長野県伊那谷の小さな部落で生れ、中学生までここで育った。きのこの最初の出会いは小学校3年生の時である。当時は村に青年学校という教育制度があつて、父はその教師をしていた。その事もあつてか我が家では当時は珍しかったアスパラガスやオクラなどの比較的新しい作物を栽培していた。シイタケもその一つで、30本ほどのほだ木が手製の半地下式の温室の中に立て掛けてあり、毎朝如雨露で水をかけていた事を憶えている。

ある日の朝のことだった。父の呼ぶ声に急いで温室へ行って見ると、なんと十数個の大きなシイタケが見事に生えているではないか。私は思わず喜びの声を上げたものである。近づいてよく見ると、傘と茎はあるが根が見えない。不思議に思って父に聞くと、きのこを採ってみると言う。言われるままに茎を持って静かに引くと、きのこは容易にほだ木から離れた。そして、離れた後には真っ白い綿のようなカビが見えた。その時父は、これがシイタケの根でここから水を吸って大きくなったのだと教えてくれた。

小学校は全校30人足らずの小さな分教場で、1年生と2年生が一つの教室に入って先生は一人、いわゆる二部学級の教育を6年生まで受けた。そして、中学生時代は太平洋戦争の最中で、軍需工場や農家の手伝いなどの勤労奉仕の毎日で授業は殆ど無かった。その上、学年の短縮卒業というので5年の修業年限のところを4年で卒業させられた年代である。したがって、この



筑波山をのぞむ土居祥兌先生のご自宅屋上にて2007年7月10日

年代に受けるべきであつた語学や生物学の基礎は、残念ながら省かれていたのである。

### 研究の発端は木材腐朽論

きのこの本体が菌糸である事を本格的に習つたのは、長野農専(現・信大農学部)に入って樹木病理学の講義を受けてからである。当時の水本晋先生の樹木病理学と木材腐朽論は、その基礎になる菌類学概論から入つたので非常に解りやすく、特に菌類の分類や生態学の話は後のきのこの研究を進める上で非常に役に立つたと思っている。中でも木材腐朽菌の材質腐朽性については私が最も関心を持った点で、これが発端になって後の高校教師の時に行った研究に繋がつたものと思っている。

学校を卒業して直ぐに就いたのが高校の教師である。1年女子クラスの生物学を担当していたが、戦時中の厳しい教育を受けた私にとっては女子生徒に囲まれた毎日の授業が楽しくて、勇躍として通ったものである。当時の信濃教育会には、教職員の個人研究に対する研究費の助成制度があった。私は学生の頃からの夢であった「シイタケ菌の木質分解能」を調べたいと思ってこれに応募したところ、幸いにも通ったのである。この研究の目的は、シイタケ菌が木質組織中のセルロースやリグニンをどのように分解するかを知る事であった。そのためには分析器具の準備が必要である。しかし、高校の生物室にはそのような器具は無く、さりとて助成で頂いた研究費は微々たる額で器具や試薬などの購入までには届かなかった。そこで、やむを得ず不足分は大切にしていたカメラを手放すなどして何とか間に合せたのである。また、分析実験の過程で生じた疑問などは化学を担当していた先輩・平出利男先生の助言を受け、報告書の取り纏めについては親友・登内順治先生の知恵を借りて「シイタケ菌のセルロースおよびリグニンの分解について」の報告書が出来上がったのである。今になってこれを読み直してみると、至るところに不備が目立ってわが身の不勉強さに恥じ入っているが、私が生涯の仕事として続けているこの研究は、この時の経験が大きな影響を与えてくれたと思っている。

### 更なる高みへの挑戦

高校教師3年目になった時に、自分が教えた生徒の将来を考えると教師という職業に自信を無くしてしまい、結局は辞表を提出する事になった。そして、これからの進むべき道を考えた時に、頭の中に強く残っていたきのこの研究で生きようと決心したのである。そのためには、もう一度勉強し直す必要があると考えて信大の恩師・浅田節夫先生に相談した所、京大農学部  
の浜田 稔先生を紹介して下さい。

たしか桜のつぼみが膨らみ始めた頃だったと思う。私は京都に浜田先生を尋ねた。そして自分の考えを話すと、それならば旧制の大学院に研究生制度があるから、今からその試験を受けなさいと言うのである。そして、早速「菌類形態学」とドイツ語で書かれた分厚い原著と辞書を渡されて、これを2時間内に訳せるだけ訳せと言われた。私はこの突然の試験に途惑ったが、それでも1ページ半ほどは訳したと思う。もう駄目だと諦めて家に帰っていたところ、4月の始めに浜田先生から電報が届いた。それには「合格した。布団を持って直ぐ出て来い。下宿は探してある。」とだけ書いてあった。

### 晴れて進学、就職するも葛藤にぶつかる

かくして私は、京大農学部農林生物学科応用植物学研究室(略・応植)の一員になれたのである。当時の応植には今村駿一郎先生を筆頭に高等植物の開花生理を旗にした高等族と、浜田先生を頭にきのこの生理・生態を掲げた下等族があり、両族合同で定期的に集談会や輪読会が行われていた。この集まりは、互いに研究上の悩みや手法などについて意見を交換し合い、助け合いながら研究心を鼓舞するのに大きな力になった。とくに輪読会は、年長の院生が率先して専門用語の使い方や論文の書き方を指導しており、私はこの時に得た知識が今になっても大いに役に立っている。その頃は同僚の衣川堅二郎さんと机を並べており、二人で行った「エノキタケ子実体形成に対する低温の影響」の結果も論文として残している。

京都の生活はすべてアルバイトで賄っていたが、経済的にも年齢的にも限界を感じていた頃、信大農学部から助手の話をいただいた。赴任した先は林学科の造林学研究室で、与えられた課題は「カラマツの生長ホルモンの研究」であった。信州といえばカラマツの本場である。ここでカラマツの菌根菌の研究をしようと夢見ていたが、やはり助手の身では教授の指示に従わざ

るを得なかった。この仕事は、定期的に採取してきた資料をマニュアル通りに抽出実験を行えば数字は自動的に出てくる。だから、考える必要がなかった。一方の菌根菌の研究は、土の中の科学である。見えないところの科学である。当然のことながら深い思考力が必要になる。ここに大きな違いがあった。

### 転機が訪れ、充実した日々

悶々としている頃、たまたま特別講義で来ていた東大の先生に私の気持ちを話すと、それではと言うので紹介してくれたのが当時の国立林業試験場(現・森林総合研究所)の今関六也先生でした。今関先生は保護部長をされており、菌学界の大御所でした。早速、東京目黒に今関先生を尋ねて事情を話すと、明日にでも来るようにとの有難いお言葉をいただいたのである。

大学から国立林試への転勤辞令を貰って赴任した先は、保護部菌類研究室であった。当初は今関先生の指導をうけてきのこ類の分類と生態についての研究を進めており、浅川実験林で行った「キノコの生態に関する2・3の観察」や「新しい毒タケ・ドクアジロガサ(後にコレラタケと改名)」はその頃の成果である。今関先生が定年で退職された後は、青島清雄先生の懇切な指導を受けて「日本産 *Odontia* 属および近縁属菌類の分類学的研究」が完成し、学位論文として京大へ提出した。また、「樹上性ハリタケ科菌類」として数編の論文も報告している。

これとは別に、菌類研究室の伝統的な課題であった「食用きのこ類の栽培に関する研究」が私が引継ぐ事になった。丁度その頃は日本のきのこ産業の隆盛期に差し掛かった時で、シイタケ栽培が盛んに行われた時期である。したがって各地で病害や奇形問題が発生し、その対策に夜を徹した事もしばしばであった。「シイタケほだ木の黒腐れ病」に関する数編の研究はその頃の成果である。また、各県や業界の特産指導員の研修と外国からの留学生の指導も私の担当で

あり、さらに林野庁の雑用まで課せられた上に二つのきのこ研究室ときのこの科の新設業務が重なって、国立林試に在籍した35年間の大半は、自分の研究よりも指導業務や建設業務に費やしたと言っても過言ではないと思っている。

### 退職後もきのこに携わる

国立林試が目黒から筑波の学園都市へ移転して名称が森林総合研究所に変わった時に、私は定年を僅かに残して森林総研を退職した。そして、求めに応じて新設の大分県きのこ研究指導センターの所長の職に就いた。ここでは、研究設備や実験器具の整備と研究員の採用・教育などの本来の仕事は難なく進んだが、行政事務との折衝や、県会議員との交際面では物議を醸した事もあった。これは、学究の世界で育ってきた私には、社交的な能力が欠けていた為であると反省した次第である。

乾シイタケでは日本一を誇る大分県の生産者は、足許ばかりに気をとられていて先を見る目に欠けていた。この事を知った私は、シイタケの世界の実情を知って貰うために「シイタケ国際シンポジウム in Oita」を企画し、アメリカ、台湾、香港、タイ、スイスから友人を呼んで盛大に開催した。また、県内の生産者と外国からの招聘者との間で意見交換をする場も設けた。私のこの企画に対して、県の首脳部は過去に例が無いとか言葉が出来ないなどの理由で消極的であったが、結果的には予想していた以上に生産者の生産意識は向上し、栽培現場に明るい雰囲気は漂うようになったのである。そして、県と生産者との間の隔たりが解けて、研究所まで相談に来る生産者や出張指導を求める生産団体が増えてきた。このように私の大分県在任中の10年間は、シイタケに明けてシイタケに暮れる毎日であったと思っている。

当初は3年程で帰る積もりで大分県へ行ったが、年々延ばしに延ばされてとうとう10年間にもなってしまった。それに、身体的にも苦痛を

感ずるようになったので、意を決して柏市の自宅へ引揚げる事にした。齡は丁度 70 歳、長年世話になった林野庁へ退職の挨拶に行ったところ、当時の特用林産対策室長から、これからは林野庁の仕事を手伝うように言われて、日本特用林産振興会(日特振)顧問の肩書きが与えられた。また、森林総研からは、君がきのこ科長時代に創ったきのこ種菌保存検査棟(種菌庫)だから今後は君が面倒をみてくれと言われて、OB 団体である林業科学技術振興所(林振)の主任研究員の名称を付けられた。しかし、長い間の公務員生活が終わってこれからは自由気ままな生活に入れるとばかり思っていた矢先であったので一時は躊躇したが、私のような者に声を掛けて下さった好意に応えなければと考えてお受けする事にしたのである。

以来 13 年間、日特振では各種委員会の委員長を仰せ付かって賛否両論の意見を取り纏め、今後の施策の参考資料として林野庁へ提出した。また専門的な質問や相談についての回答や指導の役も私が担当し、業界や生産者のこれからの方向について助言してきた事もあった。とくに国の予算を受けて行う事業については、常に公的な立場で対処し総てを公開する事に努めた。他方、種菌庫では登録菌株の保存と管理業務は林振の私が全責任をもって行う事になったが、実態は空調施設の老化と菌株の変異問題のために主力を費やさざるを得なかった。最も重要な菌株の変異の有無の判定には、60 有余年の自分の経験から得た知識を基にして、菌叢の性状から判定する方法を考案して実際の用に供した。

種苗法の運用については、現行の流通種菌の検査に見られるように、法律に基づいて国が行うべき検査を、検査を受ける立場の企業が行っているのが実態である。この不文律に対して所轄官庁である林野庁は何の反応も示していない。他方、林振が受持っていた登録菌株の保存管理の業務は、国の入札制度の改革に伴って種苗管理センターへ返上する事になった。したがって、

この事によって種苗法は本来在るべき姿に戻ることになる。

### 何時もきのこから離れた事がない

顧みれば、私も齡 84 才になった。その間、高校教師、京大農院生、森林総研、筑波大学非常勤講師、大分きのこ研究所、別府大学客員教授、日特振顧問、林振主任研究員とさまざまな道を歩いてきたが、何れの時期においてもきのこから離れた事はなかった。とくに森林総研時代の後半からは、シイタケとの繋がりが一層強くなった。これは、きのこ産業の国際的競合の影響によるものだと思っている。

このように、きのこと共に長い間生きてきた事が幸いしてか、日本菌学会と日本きのこ学会では両会とも名誉会員に祭り上げられた。また、食用きのこ類の生理・生態学研究では農林水産大臣賞をいただき、食用きのこ類の栽培学的研究では森 喜作賞に預かり、菌学の教育文化に貢献したと言うので日本菌学会からは教育文化賞を頂戴した。いずれもこの上もない名誉な事で、きのこの事しか出来なかったこの不器用な私を認めて下さった皆様に心からの感謝を申し上げたい。

平成 23 年の 3 月、体調の不調もあって一切の仕事を返上した。長い間周囲から監視されていた生活から抜け出して、ようやく静かな生活に戻ることが出来た。今は清々した気持ちで毎日を過ごしている。ただ、健康保持の事もあって今は毎月 1 回の予定で岐阜県の山の中の小さな部落へ出掛けている。ここには、地元の資材を使って恵まれた自然環境をそのまま活かした所謂山村地域型のシイタケ生産を行っている会社があり、この省力的な生産方式が私の最も理想とする生産体系である事から、微力ではあるが応援している次第である。

### 生涯の友となったシイタケ

シイタケは優れた健康食品であると言われて

いる。そしてまた、漢方医学を代表する薬用きのこでもある。さらに、漢方薬は継続して用いないと効果が現れないとも言われている。しかし、だからと言って毎日シイタケを食べるとなると、そこにはある程度の制約が生ずる。この制約を緩和するためには、シイタケそのものの形質と食べ方に、もう一つの工夫が必要ではないだろうか。私はこの事を考えている。

今の私の健康状態は腰痛の悪化によって歩行は不自由になったが、幸いにも内科的には異常がないと医者はいう。とくに毎日の生活に気を

使っている訳ではないが、ただ一つははっきり言えるのは毎日欠かさずにシイタケを食べている事である。この習慣は、研究所時代に試験で栽培したシイタケの残品を廉価で分けて貰った時から今日まで続いている。旅行などで2-3日食べるのが欠けると、胃腸の調子が不調になる事は靦面である。もちろん、これは私の実体験からの事であって医学的な根拠は知る由もないが、今の私とシイタケは、食の上でも研究に上でも切り離す事が出来ないものになっている。

(2012.05.05 稿)

## 著作紹介

### 「きのこを通して自然を知る—和良の集落に理想が見えた」

著者：古川久彦，出版社：岐阜新聞社，2013年1月17発行，251頁，  
ISBN：978-4-87797-188-5，判型：186×13 cm，1238円（+税）

本稿をご投稿頂いた古川先生の近著。本書は4章からなっており、最初の1章（約50頁）は、ここでご紹介いただいた内容のもっと詳しいお話。2章（約25頁）は、著者が懇意にされている岐阜県郡上市（旧、郡上郡和良村）のきのこ栽培会社の紹介。この会社はシイタケの菌床栽培では日本ではじめて有機JASの認可を得たところなのだそうで、この会社からは、菌床栽培でありながら、肉質のしまった味のよい上質のシイタケが生産されており、会社ばかりでなく生産物にも、とにかくよい意味での特色があり、いろいろな意味でお手本になります、というお話。3章はきのこエッセイ。そして第4章（約125頁）の「翁茸閑話」と題したところが、著者の長いきのこ研究歴にうらうちされた、栽培茸業界の現場や指導を実際に経験した人ではなくては書けないような、実にあじわい深い内容のエッセイになっています。（吹春俊光）

